

鑑賞領域と表現領域の有機的関連づけを目指した授業改善

専攻 教科・領域教育専攻
コース 芸術系（美術）コース
氏名 若井 ゆかり

指導教員 山 木 朝 彦

1. 研究の動機とその目的

昭和 22 年版学習指導要領（試案）の項目で「鑑賞」が記されて以降、その研究については学会誌や研究会でも盛んに取り上げられている。今日では、各教科に求められる「言語活動の充実」や、時数削減に伴う美術教育関係者のもつ危機感、アメリカ・アレナスの「対話型鑑賞」における実践が大きな反響を美術界にもたらした点も無視できない。

実際、平成 20 年改訂（現行）の学習指導要領においても「鑑賞の充実」では、すべての学年で独立して指導することや地域の美術館などを利用することが明示され、能動的な鑑賞の必要性が説かれている。しかしながら、その実態には課題が多い。学芸員に依存したまま進む美術館との連携や、時数削減の中、「表現」の時数の確保に追われての実践に、「鑑賞」に臨む姿勢は消極的にならざるを得ない。本来、「表現と鑑賞の一体化」に言われるように、この両輪で進むことで子どもたちの豊かな情操は培われるべきはずである。今ある現状に、そのまま入れ込むのでは無理が生じ、高まる「鑑賞」への期待も有名無実が終わるのではないだろうか。

そこで、本研究では、美術教育における今日的な課題をふまえて、「表現」と「鑑賞」の関係性を捉え直し、現場において浸透できうる「鑑賞」のあり方を探っていきたいとの思いから、このような研究課題を設定した。

2. 本論文の研究方法

本研究では、今の美術教育を「鑑賞」の視点から捉え、その現状と課題を明確にし、「鑑賞」と「表現」の関係性を再考した上で、2領域の有機的な関連づけを意図した教材開発とカリキュラムの改善に取り組むことを目指した。

まず「鑑賞」と「表現」の関係性を先行研究等の論考を整理しながら、アメリカの美術教育研究者であるアイスナーの考えを基軸として「鑑賞」と「表現」の関係性の再考を試みた。

また、鑑賞と表現のつながりについて、授業計画立案の観点から見直し、従来ある、「表現領域」の活動において、「鑑賞領域」でおこなわれてきた芸術作品の鑑賞を位置づけた。更に、「表現」から「鑑賞」へ、「鑑賞」から「表現」へと2パターンの構成を組み、授業実践を実施した。

このように、本論文では、鑑賞領域と表現領域を有機的に結びつける教育的意義について論考をすすめるだけでなく、2領域の関連づけを意図した授業案を構想し、実験的に実施することで、その成果を検討し、子ども達の主体的な学びを促す研究を展開している。

3. 研究の内容（各章の概略）

第1章では、美術教育の現状を鑑賞教育の観点から見つめ直し、その課題について押さえた。「鑑賞」における研究は盛んで、対話型鑑賞という方法論の浸透と相まって、美術館における鑑賞学習も充実してきている。しかしながら肝

心の学校現場における「鑑賞」への取り組みは消極的で、美術館との連携においても、学芸員に依存した、その場しのぎの取り組みも少なくない。参考作品や児童の相互鑑賞は行われるものの、作家作品の鑑賞いわゆる単独の「鑑賞」への取り組みは進んでいない現状がある。

第2章では美術教育における「鑑賞」のあり方を「表現」と「鑑賞」の関係性から問い直した。両者は「感情の産物」と「知的な活動」に分けて考えられがちである。しかし、「表現と鑑賞の一体化」のように、子どもの分断化しえない造形活動を2分化してとらえる発想法が問題ではなからうか。「表現」と「鑑賞」の密なる関係性を前提とし、両者をつないでいくことが大切である。指導要領に登場した〔共通事項〕がその役割とも捉えられるように、両者を貫くテーマを見だし「表現」と「鑑賞」の今後の展望を見だししていくことが重要であると考えた。

第3章では先の章を受け、「鑑賞」と「表現」をつなぐ意義を教材立案の観点から説いた。中学校では鑑賞と制作の関連づけは当然のように行われているが、小学校における実践は課題も多い。この点について、アルンハイムの「知覚分化」の説に基づくアイスナーの論に拠れば、視覚形態を単に「見る」のではなく「見て取る」ために必要な高度な知覚は、経験と努力によって身につける事ができうる。「鑑賞」において早すぎるということはない。むしろ、一般的な認識分化と同様に経験を重ねることで深まっていく。つまり小学校段階における「鑑賞」は意図して教材に組み込まれていくべきものである。

第4章では、教材立案の必要性に基づき、授業実践研究を前提とした2題材の授業立案を行った。自然材を用いる「造形遊び」にアンディ・ゴールズワージーの鑑賞を、また、フロッター

ジュを用いた「絵に表す」の活動にマックス・エルンストの鑑賞を組み込んだ。そして、「鑑賞と表現の有機的なつながり」を見取るために授業構成において、「鑑賞」から「表現」へ、「表現」から「鑑賞」へと2パターンに分けての実践研究を試みることにした。

第5章では研究授業の実施によって得られた分析をまとめた。先に述べた授業構成の違いは顕著に児童の表現に表れた。2題材に置いて授業の流れを変え、「表現」「鑑賞」双方の相乗的な効果についてそれぞれの授業計画に特有な学習成果を見取ることができた。

第6章では、表現領域と鑑賞領域の関連づけを意図したカリキュラムの検討を行った。本論における2題材以外にも、その可能性は大いに見取ることが出来る。今後、更なる実践研究による実証を積み上げていきたい。更に、現職教員のインタビューに基づき、現場の実践レベルでの視点を通して本研究を捉え直すことを試み、現場や児童に還元できる研究の方向性を示した。

4. 研究の成果と課題

本研究における実験的授業において「表現」「鑑賞」の組み合わせは、各々にとって相互補完的な働きを担うことが見取れた。カリキュラム検討にまで至ることができ、現場に還元できる形でこの修論をまとめることはできた。今後、他学年、幼稚園、中学校、高等学校等、校種をまたいでの比較検証や、表現領域における他の内容での題材開発をも試みていく必要がある。

アイスナーが、自身の研究テーマに「美術の表現や鑑賞を通して子どもたちに生き生きとした生活をさせること」を掲げたように、本研究を足がかりとし、今後とも子どもの姿に現れるような意義ある「鑑賞」、そして「表現」の実践につながる授業改善に取り組んでいきたい。